

せいそう魂

No.006

2022年9月5日

責任者：高野 飛鳥

編集者：須永 祥平

第23回 自治労青年女性 中央大交流集会

事前学習会・結団式

事前学習会では、都本部女性部の三木さんより『賃金の基礎知識』というテーマで講演を受けてきました。講演では、なぜ私たちが『賃金』という言葉を使うのかに触れ「私たちが得ている賃金は『賃金の再生産費』であり、毎日同じ状態で働ける賃金でないといけない」と伝えました。また、その賃金はどのように決まっているのか『人事委員会勧告』と『人事評価制度』について説明を三木さんの出身単組である立川市をモデルに話していただきました。説明の中では、境遇の違う4つの賃金モデルグラフを参考に定年までの賃金にどれだけの違いがあるのか、度重なるマイナス勧告によって賃金水準の低下があることを示しました。最後には、近年公務職場で一番課題となる『定年延長』に触れ「若い世代の人たちは無関係だと感じているが、役職定年制度や定年前の賃金水準の見直しがあることから定年まで安心して働き続けられるように関心を持ちましょう」と締められました。

結団式では、自治労青年部部長の小原部長より『中央交に参加する目的と労働組合の意義』というテーマで講演を受けました。参加する意義として『要求しても実現できていないことに、どう取り組みればいいかヒントを得られる・当たり前だと思っていたことにおかしいと気づく・全国の仲間の頑張りを肌で感じる』と示しました。そして、事前事後でしっかり総括し、当日で終わらせるのではなく、仲間に伝えて取り組み繋げることの重要性を話されました。次に、労働組合の意義として日本と世界の労働環境のグラフを参考に「働きやすい職場作りをするのが労働組合であり、そこに正解なんてない。素直に感じたことを仲間と話し合う中で学習と交流を図り、それを実践することが求められる」と伝えられました。式の最後は都本部青年部高野部長より、あいさつを受け、参加する仲間と共に中央交成功に向け意思統一を図り締めました。

私が事前学習と結団式に参加してみて感じたことは、些細なことでももっと要求していくべきということです。どうしても大きく変わることを望みがちでしたが、講演を聞いて、要求していくうえでの細かなヒントが近くにたくさんあるなと思いました。日常で働いていて感じる少しの気になりも長く働いていく私たちにとってはストレスになってくることもあり、講演の中で「もっとワガママになっていい」という言葉を聞いてより仲間と話す機会を増やしたいと感じました。自分では感じていないことも仲間の中には我慢になっていることも多くあると改めて感じたので、しっかり実践に繋がっていきたいです。自分自身は今回参加できませんでしたが、これからも全国で働く労働者の仲間との『横のつながり』を大切にし、取り組みを進めていきたいです。

初日の様子

最後の中央交でした。
中央交で学んだ経験
を活かし、基本組織で
も頑張ります！

皆さんの声をしっかりと政治
の場に持ち込み、課題解決と
運動前進において最大限取り
組んでいきます。
ともに頑張りましょう！



参議院議員鬼木まことさんと共に記念写真



事前学習会・結団式



『文化交流』とは県本部や地連単位で集会参加者に取り組みの成果や課題などを共有するものです。形式としては、壇上での『構成詩』（寸劇のようなもの）を通して、より分かりやすく、臨場感のある発表が主でした。しかし、コロナ禍での集会ということ、事前に動画を撮影しての形になりました。

今回は3つの県本部から発表がありました。まず、北海道地連の名寄市なよろ労青年部からは、『仲間と闘う賃金闘争！』として21人事院勧告による一時金削減を阻止するために、お菓子に様々なメッセージを書き、団結の意思統一を図るため『団結お菓子行動』に取り組み、また漠然としたマイナス勧告の影響を『実損額ステッカー行動』を通じて各青年部でしっかりと把握するという行動を行いました。集めたステッカーは団体交渉の会場に貼り出し、青年の厳しい実態を訴えたことで当局の姿勢を崩し、基本組織の交渉にも大きな後押しとなったという内容でした。

次に四国地連徳島県本部美馬市みま職労連青年部からは、コロナ禍でもできる取り組みとして、保育職場の人員配置などを具体的に記載した『保育マップ』を作成し、保育職場の働かされ方の理解を深めました。やむを得ない合理化攻撃に対し、諦めるのではなく『青年部運動として何ができるのか』、『私たち青年が声を上げる必要性がある』といった点について、『とある人氣漫画』をモチーフにして作成しました。ストーリーとしては、仲間づくりをしてこなかったがゆえの、当局からの激しい合理化攻撃に職場が耐えられず、メンタル疾患や膨大な量の時間外勤務、不満・悩みを打ち開けられない環境になった2040年。あるきっかけにより8年前の2022年に『タイムリープ』した主人公は荒廃した未来の職場を救うべく『共に闘う仲間づくり』に奔走する…。という内容でした。

最後に東北地連から、『人間らしく働くってどういうこと？』というテーマでの構成詩です。内容としては、戦時中の労働力不足で起きた秋田県花岡町（現大館市）での中国人強制連行・労働の歴史を学びました。構成詩で登場する職場の仲間もこのフィールドワークに誘いましたが、大量の業務に忙殺されており、不参加をとげとげしく表明。しかし、そんな自らの働く方に強い疑問を感じたその仲間は、花岡事件のフィールドワークに参加しました。そこでの歴史に触れ、学びを得ることで、自分の働き方を顧み、仲間と職場変えることの必要性を強く感じました。最後にはロシアとウクライナによる戦争についても触れ、自分の職場だけではなく『安心して働き続けられる職場』を構築するために団結して運動を展開していこう！』と意思統一した。というものでした。

7月29〜31日まで第23回中央交大交流集会に本部青年部で参加してきました。今回は、社会情勢考慮の為参加人数の制限を設けたり、会場をサテライト方式にしたり、通年の山中湖開催ではなく、TOC有明で行いました。初日の開会集会では、開会あいさつから始まり、基調提起、基調講演、文化交流を行ないました。はじめに、川本中央実行委員長から「全国の仲間の討論を基に職場実態などを学んでください。そして学んだことを職場に持ち帰り実践してください」という挨拶がありました。次に参議院議員鬼木まことさんより「皆さんの力を受け参議院選挙当選することができた」「政治の場で闘っていくためには、現場の声をあげるしかない」と述べられました。連帯のあいさつでは社青同近藤委員長より「あらゆる社会運動が大切である」「我慢をしていることを自己解決するのには限界がある」と述べられました。

続けて基調提起では、毛利女性部長より「資本・当局はどれだけ安く働かせるだけを考えている」「労働運動を通して職場の改善をしてほしい」と提起されました。基調講演では斎藤幸平先生より「ポストコロナ時代の新しい社会の在り方」について講演を受けました。講演を聞いて正直内容が難しいところもあり「何を伝えたいのかな?」って思う場面もありましたが、講演の中で印象に残っているのは、「SDGsは大衆のアヘン」「小さなアクションをされていて、大きなアクションに気づけない」とお話があり、物事の本質の大切さが大事だと感じました。SDGsを推進すれば貧困問題や環境問題が根本的に解決するわけではありませんが、物事の視点を変えることで見方が変わるのかと思いました。これからもSDGsだけでなく様々な問題に対し勉強して知識をつけたいと思いました。

最後に、初めて中央交に参加してみて、普段聞けない話や他都市の分散会など多くの経験をする事ができました。私自身、社会全体の経済成長や気候変動問題などあまり気にしたことがありませんでしたが、知るきっかけの一つになって良かったと思います。今回学んだことを職場に持ち帰り、活かしてこれからの取り組みに繋げていきたいと思っています。

職種別分散会

2日目の反合理化職種別分散会では、東京、愛知、兵庫の各都県で環境や清掃業務に従事する7名の仲間とお互いの職場や賃金について、討論を行いました。はじめに、労働大学出版の『自己責任と自助でこわされる賃金・労働・社会』を用いて参加者同士で読み合わせを行いました。その中で、公務職場における不払い残業や年休の未取得について、この間の合理化により慢性的な人員不足が課題になっていることを全体で認識するとともに、その改善策として、新規採用による人員の確保ではなく、AIやRPAの導入が進んでいる実態を知りました。しかし、機械化によって効率化された業務により、職員一人ひとりの業務量は増加し、かえって超勤や年休が取得できない状態に陥っていることが、現状の問題点であることが浮き彫りとなっています。清掃の現場では、機械化による悪影響は少ないかもしれないませんが、効率化されることによる業務量の増加は身近なところにあります。私たちの『これからの労働』について深く考えられるキッカケになりました。

次に、事前アンケートを基にした職場・賃金実態討論では、集まった仲間から現在の働き方や生活における悩みや不満が多く出されました。岡崎市の収集部門では、可燃班、資源班、粗大さわやか班に分かれ、午前中に可燃ごみを収集し、午後からは不燃ごみとペットボトルの収集を行なっています。10年間も新規採用が行われなかったため、技能業務職員の知識や技術の継承ができないことが問題として報告されました。また、働く者の声を無視した職員適正化計画に職員は翻弄され、コロナ禍の業務と相まってメンタルを病む仲間も少なくないそうです。

稲美町の町役場では、課の人数が極端に少ないため、苦情対応や不法投棄対応で職員が現場へ行ってしまうと、役場内の業務が回らなくなる実情があります。ただでさえ少ない人員の中に、会計年度任用職員も含まれているため、職員の負担は増すばかりとなっています。その結果、窓口対応などに遅れが生じ、かえって住民に負担や不満を与えている現状があります。また、収集業務を民間委託しているため、コースの変更や不測の事態に担当者から電話がかかってくることもあり、休日でも電話に出られるようにしなければならぬという悩みが報告されました。

賃金実態については、参加者全員が何かしらの『ガマン』をしていることが明らかとなっています。特に、家庭を持ち、新たに子供が生まれるという仲間からは「東京で働いているのに家賃が高すぎて東京に住めない」という怒りや「子供がいると突発的にお金がかかることがあるため、余裕とゆとりが持てる賃金が欲しい」といった切実な声が上がっています。現状において『最低限度』の生活はできていますが『健康で文化的』という部分は、まったく実現していないことを全員で再確認し、日常的な『ガマン』をしっかりと点検するとともに、賃金水準の向上に向けた要求を青年部全体で上げることが必要であることを意思統一しました。

最後に、職場・地域を越えた仲間との実態討論によって、同じ職種であっても仕事のやり方や賃金水準の違いはあっても、抱えている問題や課題、悩みや不満は似ていることに気付きました。そして、同じ仕事でも「どうしてここまで違うのか」、「違いを埋めるにはどうすれば良いのか」など、分散会を通し、仲間との「横のつながり」を広げ、職場からの運動に繋げる決意を固めることができました。

たたかいの報告

中央交2日目に岩手県本部自治労奥州市職労の佐々木智香さん、富山県本部富山県職労の酒井暢明さん、鹿児島県本部鹿児島市職労の大西玲那さんの3名から各職場におけるたたかいの報告がありました。

自治労奥州市職労からは『新規採用職員の加入促進強化の取り組みについて』という報告がありました。全国では公務職場における最大産別は自治労ですが、岩手県においては自治労連が最も大きい産別になっており、どのようにして最重要課題である新規採用職員を自治労の組合員として獲得したのかという内容でした。

富山県職労からは『富山県市職労の支部における長時間労働・不払い労働是正のたたかい』という報告がありました。勤務時間を適正把握するためにPCログを実施し、サービス残業が減少したが、ある地区では時間外を認められずにサービス残業になっているという仲間の声を聞き、当局とたたかい要求を勝ち取るまでの内容でした。

鹿児島市職労は『定数闘争の取り組み〜組合と組合員とのきずな〜』といった報告内容でした。毎年一月に実施している新年度の職場人員を決める交渉に向けて、305の職場にオルグに入り共に闘う仲間づくりを行ない、組合員一丸となり交渉に挑み要求を勝ち取り、次のたたかいに繋げるという内容でした。

私は、たたかいの報告を聞き、各県本部の青年女性の置かれている現状や山積している問題や課題は似ているのだと認識しました。そして、改めて声を上げ共に闘っていくことの重要性や労働組合の必要性を学びました。私たちは、何も声を上げなければ『物言わぬ労働者』になってしまい、当局のいいように使われてしまいます。しかし、一人の要望や要求では当局は相手にもしてくれません。そんな時に、労働組合という私たちの要望や要求、さらには『健康で働き続けられる職場』を実現させるためにも必用不可欠なものだと感じました。この報告をしていた、各県本部のように、勝ち取るにはどうしたらいいのか考えていかなければなりません、そのためにも、地道な取り組みではありますが、仲間と何回も話し合い、一人ひとりが仲間を増やしていく意識を持ち、強固な労働組合を作り上げていくことが、求められているのだと思いました。

二日目の様子

分散会では、自分の職場で起きている実態や各県本部の問題、課題などお互いに学び合い改善に向けて議論しました。

1人の組合員による勇気ある発言によって、当局と交渉し、時間外手当と班員1名増員することができました。



職種別分散会

新規採用者へ身近な職場から声掛けをしたことにより、組合加入率が高くなりました。

定数闘争では、座り込み行動を行い5人の増員を勝ち取ることが出来ました。



岩手県本部 佐々木さん



富山県本部 酒井さん



鹿児島県本部 大西さん

閉会集会の記念講演では『ロシアのウクライナ侵攻と日本の安全保障政策』というテーマで防衛ジャーナリストの半田滋氏より講演を賜りました。

半田氏の講演では、冷戦後のロシアの30年間の歩みを皮切りに、現在のウクライナ侵攻に至るまでを簡潔に述べていただきました。

『困窮の10年』『繁栄の10年』『停滞の10年』を歩んできたロシアは、ソ連時代よりもGDPが6割低下し、国民は困窮していましたが、石油資源の輸出によってロシアは国として大きく繁栄してきました。しかし、原油価格の低迷とクリミア併合に伴う西側からの経済制裁により、再びロシア停滞期を迎えることになりました。まさに、今起きている争いには「ロシアの再発展を目指す」という背景があるといえます。プーチン大統領は一貫して「強いロシア」を目指しており、チェチェン紛争やクリミア併合などの過去の成功体験から、軍事力行使への自信を深めたと言っても過言ではありません。

NATOが徐々に加盟国を増やしていく中で、ロシアとの緩衝地帯に位置するウクライナはアメリカからNATO加入への打診を受けました。これにより、アメリカと拮抗していることと、NATO非加入を明言しているロシアにとっては、是が非でもウクライナの加入を阻止するため侵略戦争に至ったと考えられます。

ロシアに対し経済制裁などを講じ、国際社会から排除する動きが世界的に高まっています。また、アメリカにとって、一連の事柄が好都合であるとも考えられます。直接手を下すことなくロシアを消耗させられることから、NATOへの支援を強化しています。

一方、ロシアとの関係性を強めている中国は、ウクライナ侵攻と同様に台湾への軍事侵攻の兆候が見られます。台湾有事が起きた場合、中国とアメリカの衝突は必然であり、基地が集中する沖縄を中心に日本有事が起きることが想定されます。核保有国の使用をほめかす発言や、これらの一連の出来事は世界大戦に発展しかねないのです。日本においては、国防費の増大や軍備強化など、様々な取り決めが国民に明確に示されることなく決定していくのです。今を生きる私たちは無関係でいられるでしょうか？ウクライナ侵攻から見て取れるように、争いの最大の被害者はいつでも国民なのです。同盟国同士の合同軍事演習などの武力を示すことで均衡を保つのではなく、外交努力によって問題や課題の解決に向けて動くことが大切です。

最終日の様子



防衛ジャーナリスト半田滋さん



小原 奈穂美 本部青年部長

**誰もが健康で安心して働ける
職場、社会の実現を目指すため
仲間と共に団結してがんばろう！！**



東京都本部の仲間と集合写真